

明治三陸津波の記録 2 ～風俗画報より～

1896（明治29）年6月15日午後7時32分に起こった明治三陸地震は三陸沿岸に大きな被害を与えた。

当時この津波を報じたのが1896（明治29）年7月25日発行の『風俗画報』である。「大海嘯被害録」と題し絵図でその被害のすさまじさを人々に伝えている。

リアス・アーク美術館の収蔵コレクションから現在の南三陸町に関する絵図を抜粋し紹介する。

※海嘯とは、河口に入る潮波の前面が垂直の高い壁状になり、碎けながら川上に進む現象。昭和初期までは、地震による津波も海嘯と呼ばれていた。



▲「志津川の勇婦その家族四人を救ひ出すの図（荒戸浜）」

津波襲来によって一瞬のうちに抱いていた赤子を波にさらわれたが、すぐに泳いでそれを救出し高台の木に縛りつけ、再び流出する我が家に泳いで戻り、その両親と更に五歳の我が子を救い出した。波にもまれほとんど裸の状態での救出をやったのけた。

※荒戸浜…現在の「荒砥」。

臨時増刊風俗画報第百十九号掲載（リアス・アーク美術館収蔵）